

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：李 秉鎮

論文題目：「白樺派」における他者としての〈朝鮮〉 —柳宗悦と浅川巧の場合—

李秉鎮氏の博士学位請求論文、「白樺派」における他者としての〈朝鮮〉 —柳宗悦と浅川巧の場合— は、「大正期言説空間」と氏が呼ぶ日本近代史の一時期において、雑誌『白樺』を舞台に積極的な発言を行い、やがて「民芸運動」の主導者となる柳宗悦の朝鮮との関わりを主要テーマとして取り上げ、そこに「白樺派」と通底する「他者認識」とそれとは異なる独自の方向性とは同時に存在することを指摘し、両者の拮抗する間隙に〈朝鮮〉という他者がどのように現れてくるかを考察しようとするものである。

その際、李秉鎮氏は、既に数多く存在する「白樺派」及び雑誌『白樺』に関する先行研究、柳宗悦と民芸運動に関する先行研究を踏まえながら、同時に浅川巧という人物を導入することによって新しい視点を設定し、以て従来の研究を相対化したうえで、そこにいくつかの新しい知見を加えている。特に、柳の協力者として、また「朝鮮の土となった日本人」としてのみ知られていた浅川巧の『日記』に注目して、浅川巧という人物の独自の立場と思想を剔出し、柳宗悦と彼の民芸思想そのものをも相対化する視点を明確に提示していることは、もっとも注目されることである。

李秉鎮氏の論文は4章より成り、それに「序」と「結論」が付けられている。以下、論文の構成に即して、各章の議論を紹介し、随時審査委員からの指摘を記しておく。

「序」において、氏はまず、「白樺派」の言説の主要な性格を、先行研究、特に大正期の文学をめぐる最近の議論と、アジアに対する日本の「オリエンタリズム」的志向をめぐる議論を参照しながら、日本の自己認識が幕末明治期に顕著であった「日本対西洋」という二項対立的構図から、「白樺派」の時代には「西洋対日本対東洋」という三項を含む構図へと転換したことを確認している。そのことによって、「西洋化によって獲得された近代的自我」と、それを揺り動かす「アジアへ回帰する自我」のダイナミズムが生まれる。柳宗悦の朝鮮認識を、このダイナミズムのなかで理解することが、李秉鎮氏の基本的戦略である。「序」においては、氏が本論文において浅川巧を論じる理由も述べられている。一つは、浅川という人物が、不分明なく自己に拘る「白樺派」のなかで明確に〈他者〉の問題を提示してくれるということ。二つには、浅川巧を通じて柳宗悦の朝鮮認識を相対的に考察することができるということ、である。

続いて第1章「大正期の文化と『白樺派』」においては、多く先行研究の批判的考察を通じて、「白樺派」の言説空間と自己認識の様態、つまりその「観念性」と「抽象性」とが分析される。概括的ではあるが、適格な文献処理によって妥当な結論が導かれている。

それを受けて第2章、「柳宗悦の批評的な振舞い」において、本論文の主要テーマである柳宗悦の『白樺』における批評活動が、「朝鮮の美」発見の時期を中心に考察される(第1節)。特に、柳の宗教哲学的論考と目される「哲学に於けるテンペラメントに就いて」(1913)、「哲学的至上要求としての實在」(1915)という文章に即して詳細なテキスト分析が行なわれる。その結果として、柳における批評の主要な関心が「哲学と芸

術と宗教を中心とする三位一体の理想の実現」であり、その根底には白樺派的<自己>実現への希求が存していたことを、氏は指摘する。(以上第2章第1節)この部分の論証も概ね説得的であると評価された。

第2節、「柳宗悦の朝鮮美の発見と浅川兄弟」では、1919年に浅川伯教の齎した李朝の壺を機縁として柳が「朝鮮の美」を発見する周知の事実から、1920年の彼の2回目の朝鮮旅行、1924年に京城(ソウル)の景福宮内の「観富楼」に「朝鮮民族博物館」が開館されるまでの経緯が、1919年、「三・一独立運動」(万歳事件)を機に発表された「朝鮮人を想ふ」、同年の「石佛寺の彫刻に就いて」、20年の「朝鮮の友に贈る書」、同年「彼の朝鮮行」などのテキスト分析を通じて考察される。そのなかで、柳がそれまでの「観念的・抽象的な朝鮮認識」から離れてゆく経緯が論述される。

第2節の論証を踏まえて、第3節では、柳の「民芸」論の内実が分析の対象となる。ここでは柳の宗教的美学が内包する超越性志向が指摘され、またそれと併行する民芸運動の「世直し」的な志向性が詳細に分析される。このような志向は西洋を学び西洋を内在化した柳の批評言説の一般的な性格とされるが、その克服の可能性が朝鮮美との出会いによって開かれ、朝鮮が<他者>として発見された、というのが氏の結論である。ここでも斬新で力強い論証が説得的に行なわれている。

第3章「浅川巧の対話精神—留保的なまなざしを求めて—」、第4章『日記』に見る浅川巧」は、一転して、標題からも判るとおり浅川巧を論じる。第3章では、既によく知られている浅川の著作、『朝鮮の膳』(1929年)と『朝鮮陶磁名考』(1931年)及び『白樺』に発表された文章などを資料として、浅川の朝鮮認識が検討され、柳の超越的・宗教的志向とは異なる、現実的・社会的な彼の「対話精神」が照らし出される。

また、第4章は、1983年に発見され、1996年に公開された新資料、つまり浅川の1922—23年の「日記」に基づく分析である。テーマとして選ばれるのは、浅川のキリスト者としての有り様(第1節)と彼の朝鮮認識の具体相(第2節)である。従来の研究の欠を補う重要な学問的寄与を成すものであるとの評価が為されたが、新資料として提示された「日記」の分析が第3章の論証と十分に結合されていないことなど、構成と論証において改善の余地があることが複数の審査員から指摘された。

最後に付けられた「結論」に関しては、「序」との整合性の欠如、「結論」として十全ではない、など主に「序」、「本文」との関係で批判的意見が審査員から述べられた。

全般的に見て、「誠実な労作」であり、「冷静かつ具体的な分析」が行なわれており、白樺派、民芸、柳宗悦というような大きな問題を相対化する新視点を提示したこと、浅川巧の重要性を示し得たこと、等は各審査委員から高く評価された。細部において根拠の示されない判断、不適切な表現、資料の未消化などの瑕疵があることも指摘されたが、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものでないことが確認された。

以上の審査の後、審査員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、李秉鎮氏に博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定した。